

「知識・見識・胆識」は、経営にも通じる要諦

何故、日本は、日清・日露戦争は勝利し、大東亜戦争（太平洋戦争は、GHQの指令による呼称）は、無残なまでの負け方をしたのでしょうか。

その理由の一つが、人格・人物の器の大きさの差、帝王学（リーダー論）を身に付けたかどうかの差だと謂われます。

日清・日露の戦争は、江戸時代的教養が、明治に花咲いた時期でもあるのです。

武士道や、藩校での学びが、“人間の腹”を創りました。

武士道は、①遅れをとるな。②世のために生きる。③孝を大切にする。④他者に生きる。が、その主な教えです。

それを、「知識」のレベルで終わらずに、「見識」（判断力ある知識）のレベルへ、更に「胆識」（実行力ある見識）にまで深めたのです。

明治に大きな戦争に勝利し、世界に伍して行くために、更に軍備を整備し、軍人を教育する「海軍兵学校」や「陸軍士官学校」等を創りました。軍人の人物を客観的・具体的に評価するため、“試験の成績＝頭の良さ”に重点を置いたのです。

それが、国の道を誤らすことになる、大きな原因の一つだったのです。

明末の碩学に呂新吾が、その著「呻吟語」で、人物を三通りに区分しています。

“聡明才弁なるは、これ第三等の資質。磊落豪雄なるは、これ第二等の資質。深沈厚重なるは、これ第一等の資質”と。

明治の時代は、腹のある、人物・人格者（胆識）をトップに据えたのです。昭和に入り、試験の成績（知識）順にしたのです。

ここから学ぶべきは、トップには、人格者を。周辺幹部には、優秀な人財をということです。

先日、ある市の市長選がありました。対象的な二人が立候補しました。

政治には「法に叶い、理に叶い、情に叶う」という、難しい三つの高度なバランスが求められます。法に叶い、理に叶う、この二点で、押し切るタイプは、職員が疲弊し、ギクシャクしています。残念ながら、第三等の資質の人がトップに立った悲哀です。

二代目経営者やインテリ経営者こそ、人の心、人情、人間心理を学び、人格を磨いていただきたいと思います。中央総研は、人格陶冶にも力を入れています。



今月のポイント

トップは腹を創ることです。